

## ゲ - テの「野ばら」についてお知恵拝借 (09.08.06)

### ● はしがき

(童は見たり)で始まるシュ - ベルトやウエ - バ - 作曲の野ばらの歌は日本国内でも若い人たちからお年寄りまで広く大勢の人たちに歌われている名曲である。

しかしこの歌の元の詩はドイツの有名な文豪ゲ - テによって、今から230年ほど前(1771)に書かれたものであることなどはよくは知らない人もおられると思う。

シュ - ベルトによる作曲はゲ - テの作詞から40年ほど経って(1815)の作であるが、それからでも既に94年ほど経過しているし、わが国に導入されたのは明治42年(1911)であるから、それからでも既に100年以上も経過し、その間近藤朔風氏の名訳によって今でも多くの人たちに歌われてきた極めて寿命の長い名曲である。

ゲ - テの元の詩は1番から3番までの3部構成からなり、ゲ - テ22歳に時の初恋の歌である。近藤朔風氏の訳詩は当時の時代情勢から1番は問題ないが2番、3番は其の俚訳することが許されないので曖昧な表現になっており、わが国では専ら1番のみが歌われている。

それから100年ほど経過し表現が自由に出来る平成の御世になったので、それに対応して訳詩を見直そうかと考え、その見直しの一案をここにご披露した次第である。従ってそれに関して多くの方のご意見、お知恵を拝借致したく本文を起案した。

### ● ゲ - テ (Johann Wolfgang von Goethe) とはどんな人か？

ゲ - テ (1749—1832) はドイツ フランクフルトの生まれで82歳の天寿を全うした世界的な詩人で“ファースト”を始め、“若きウエルテルの悩み”など多くの戯曲、小説を残したドイツを代表する詩人小説家、哲学者である。また彼は少年の日から年老いるまで多くの女性を愛した。

音楽家としては Mozart(1756—1791), Beethoven(1770—1827), Schubert(1796—1828), Werner(1800-1833)などと同時代の人である。

### ● ゲ - テの初恋の歌 “野薔薇”(Heiden Roeslein)

〔野ばら〕は彼が21歳の時作った初恋を歌った歌である。彼は20歳の頃、シュトラスブルクの大学で学んだが、その時、町の牧師の娘フリデリカを愛したが、22歳の時、学業を終えて故郷に帰らねばならず、彼女との愛は実らなかった。フリデリカは一生結婚せず、幸せになれなかったと言う。その彼女に失恋させた自責の思いを歌ったのが〔野ばら〕の歌の原点であると言われている。

次にゲ - テのドイツ語の詩とこれを筆者が忠実に逐語訳的に日本語に翻訳した文章を示すが、訳文を紹介する前に、詩の文章だけでは判りにくいところがあるので若干補足説明を付けておこう。

少年がばらを折るという行為とばらが少年をとげで刺すという行為は、男性と女性との間の愛の合歡を意味するものであることを理解すると詩の意味が判りやすい。

1番は少年と彼女即ちばらとの美しい出会いの場面を歌っている。

2番では少年がばらの枝を折り、ばらは少年をとげで刺すことによって、二人の愛が結ばれること期待する楽しい場面である、

3番の詩の中には明示されていないが少年が故郷に帰ることによって二人の愛は破れる場面である。

そしてその別れ際に少年が無理に交際を迫り、薔薇は抵抗する場面を表している。

彼女は悲しんで悩み、少年は将来の仕事の為に心ならずも彼女を捨てることになり彼女に対しての一生自責の念に駆られるという悲恋の物語である。

● ゲ - テの元の詩の逐語訳

### Heidenröslein

1 Sah ein Knab' ein Röslein Stehen

Röslein auf der Heiden,

War so jung und morgenschön

Lief er schnell es nah zu sehen,

Sahs mit vielen Freuden,

Röslein, Röslein, Röslein rot

Röslein auf der Heiden.

2 Knabe sprach: Ich breche dich,

Röslein auf der Heiden.

Röslein sprach Ich steche dich

Dass du ewig denkst an mich,

Und Ich will's nicht leiden

3 Und der wilde Knabe brach's

Röslein auf der Heiden.

Röslein wehrte sich und stach,

Half ihm doch kein Weh und Ach,

Musst' es eben leiden,

Röslein, Röslein, Röslein rot

Röslein auf der Heiden.

### 荒れ野の薔薇

1 一人の少年は野薔薇が立っているのを見た

それは 若々しく朝日のように美しかった。  
彼はその薔薇を見る為に急いで走りよった。  
そして、非常に喜んで薔薇を眺めた  
薔薇、薔薇。赤い薔薇 荒れ野の薔薇。

2 少年は言った [僕はお前を折るよ]と

荒れ野の薔薇に言った。

薔薇は言った[私はあなたを刺すわよ]と

あなたが何時までも私のことを思ってくれるように。  
そしてこれからは二人の愛が切れないかと悩む事はなくなるだろう。

3 そして少年は乱暴にばらを折った。

ばらは抵抗して少年を刺した。

薔薇は“ああ-痛い”と叫び声を上げたが  
何の役にも立たなかった。

そして薔薇は何時までも悩まなければならなかった。

上記訳詩には筆者独自の解釈による部分が若干ある。例えば2番で少年の薔薇を折るよという呼びかけに、薔薇が喜んで少年を刺すことによって対応し、二人の愛が長く続くことを願う場面とか、3番は少年が故郷に帰る為に別れる場面であることなどは、筆者独自の解釈である。この解釈と異なるご見解の方は是非遠慮なく反論していただきたい。

ドイツ語の解釈については、あまり難しい言葉はないので問題ないと思うが、3番の4行目のHalf(原形 helfen)について補足説明するとドイツ語のhelfenは英語のhelpと同意語であるが英語と若干異なって“役に立つ”という意味に使われる。主語はWeh und Achでこれが野薔薇に役に立たなかったと言う意味である。

● 訳詩（歌詞にあわせた翻訳）

従来の近藤作風氏による訳詩

1. 童は見たり、野中の薔薇  
清らかに咲ける その色めでつ  
飽かず 眺めぬ  
紅 におう 野中の薔薇
- 2 手折りて行かん 野中の薔薇  
手折らば 手折れ 思い出草に  
君を刺さん  
紅におう 野中の薔薇
- 3 童は折りぬ 野中の薔薇  
折られてあわれ  
清らの色香 永久にあせぬ  
紅におう 野中の薔薇

今回提案する訳詩

1. 童は見たり、野中の薔薇  
清らかに咲ける その色めでつ  
飽かず 眺めぬ  
紅 におう 野中の薔薇
2. 童は 告げぬ そなたを折ると  
野ばらは 刺すよ 永久に我を  
思えと 願う  
紅 におう 野ばらは 楽し
3. 童 手荒に 野ばらを 折りぬ  
野ばら 防ぎて 童を 刺しぬ  
騒ぐも むなし  
野ばらは 去りぬ 野ばらは 悲し

ご意見

- 変更しないで従来のままでよい
- 改定したほうがよい

提案どおりでよい  
次のように変えたほうがよい